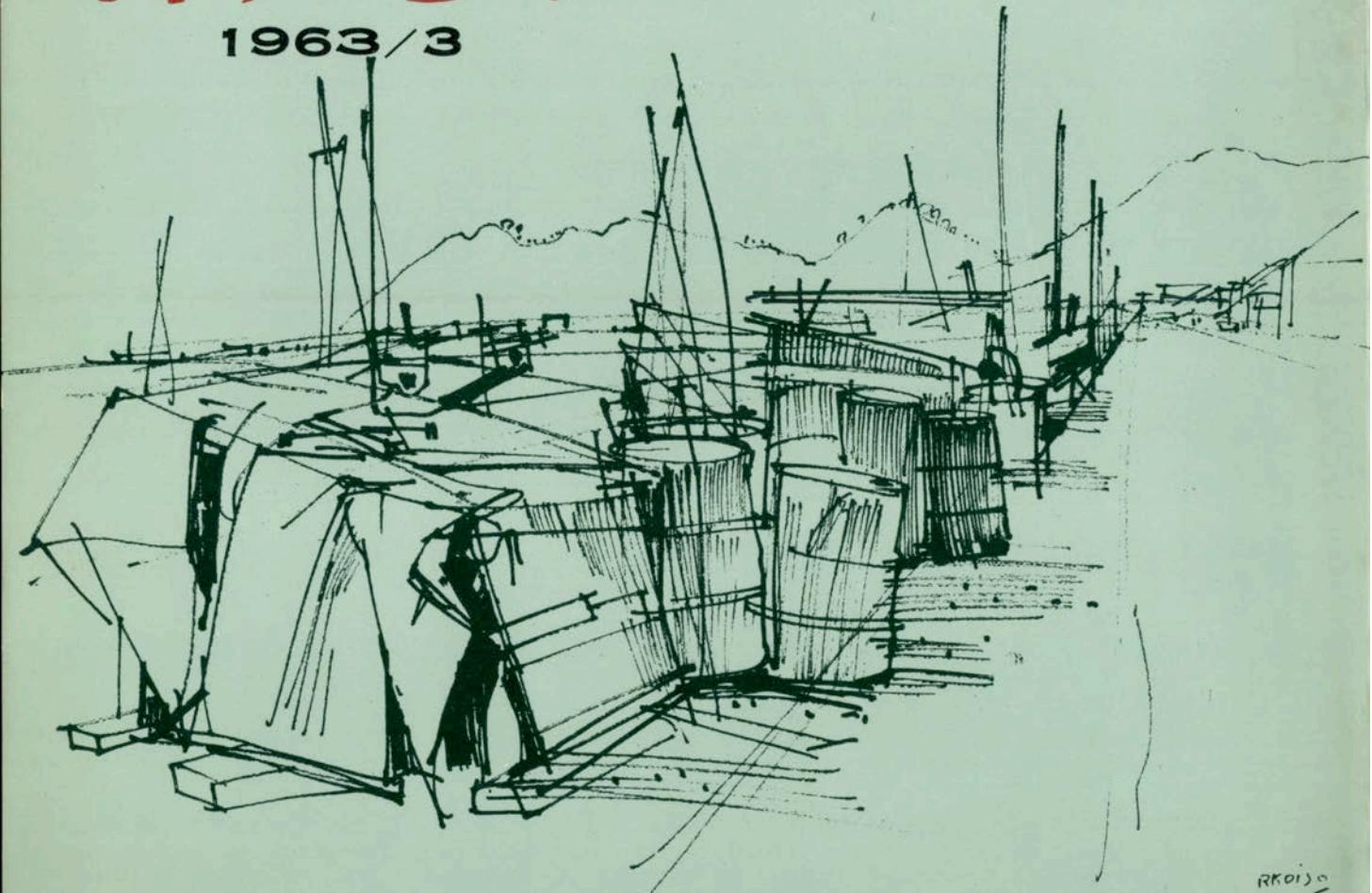


月刊「神戸っ子」昭和38年3月1日印刷 通巻第24号 昭和38年3月1日発行 毎月1回1日発行

郷土を愛する人々の雑誌

# 神戸っ子

1963/3



RKO125

monthly magazine kobekko march 1963 no, 24

**SONY**  
マイクロテレビ

世界最初のエピタキシャル・トランジスタ使用  
トランジスタが  
テレビを変えた



ソニー商事株式会社大阪支店  
神戸ソニー販売株式会社  
TEL (078) 64-1022  
8606-77

オールトランジスタ24石 5-303型 ¥65,000

- 世界一小さく世界一軽い・電話と同じ大きさ
- 自動車の中でも、どこでも、ごらんになれる
- キメの細かい美術印刷のようなすぐれた画質
- 電源は専用電池・電灯線・自動車のバッテリー  
一すべてOKで消費電力は大型テレビの1%

これは神戸を愛する人々の手帖です

あなたのくらしに楽しい夢をおくる

神戸を訪れる人にはやさしい道しるべ

これは神戸っ子の心の手帖です





若さに2つのタイプがある

謹いアイビー調のVANタイプ

若い紳士のおしゃれの主流—ヴァン

ボタンダウンのYシャツもストライプの上衣も流行の本家はこゝ。

石津謙介の製作ばかり。

パッと目を引くJUNタイプ

平均年令21才という若いデザイナー集団  
「ジュン」彼らが着たいと思ふものを製品化したのがJUNのファッショ

ほとばしる若さ そのものの色と型。

大胆 軽快。ローテーンからどうぞ！

VAN JUN

神戸独占特約店

おしゃれ洋品の

まからすや

mac

マッカ

神戸・三ノ宮店・センター街

神戸・トアロード店・センター街西口

神戸・新開地店・新開地本通

姫路店・姫路駅デパート2階



きものと細貨

神戸  
東京

	東	西
新橋店	店	店
TEL	/TEL	/TEL
小松ストア	088362	66362
地階(代)	79(代)	79(代)

おんざら庵

# 神戸と女性

北条きく子

東映俳優

可憐な娘役とかお姫様スターの北条きく子さん（19才）は、6才のときから日本舞踊に入り、藤間流の名取りで、藤間友喜枝。『幕間』主催の登龍会に招かれて、国際会館で相手役の里見浩太郎と『異八景』を踊り芸達者なところを披露、現在、東映で『利根の朝焼』、『中仙道つむじ風』にセット入り、ほかに読売テレビ『C調紳士録』で活躍している。（写真は神戸国際ホテルロビーにて）



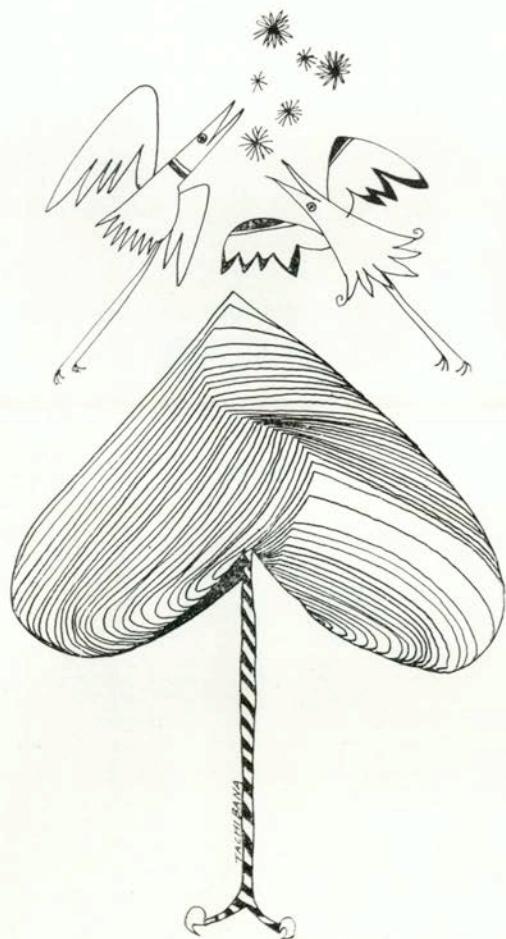


ご結婚のお祝いに、ミキモトバール  
真珠は花嫁の宝石です。  
やさしい愛のシンボルです。  
ミキモトバールは、世界の花嫁のあこがれです。

御木本真珠店  本店—東京・銀座四丁目

神戸店—三宮・神戸国際会館 TEL (22) 6 2

大阪店—堂島・新大ビル TEL (361) 0220



## 3月 目次

- 1 SECOND COVER／絵・中西勝
- 3 神戸と女性／北条きく子
- 7 連載隨想談話第7回／神戸を美しい街にするために・白川渥
- 10 連載第2回・神戸とエトランゼ  
ふるい手紙／王重山氏を訪ねて・陳舜臣
- 15 連載・問わず語り／最終回  
上方の三都・司馬遼太郎
- 21 野の花対談④／岡部伊都子・竹田峯子
- 24 座談会／東京売りの神戸買い／  
岡崎忠・牛尾吉郎・角南猛夫・永田良一郎
- 30 私の好きなスター／貝原六一
- 32 華麗なるウエディング・ドレス／福富芳美
- 36 ようこそフランス艦隊・伊達俊太郎
- 41 座談会／はくらいの神戸っ子
- 44 びんくこーなー (T)
- 50 紳士入門①／英國紳士とジャパン紳士  
竹田洋太郎・鴨居玲
- 52 神戸うまいもん地図・ランチタイム
- 54 神戸うまいもん巡礼／No.7・赤尾兜子
- 56 KOBEKKO SHOPPING GUIDE
- 60 れんさい隨想／⑧神戸のこと手当り次第  
淀川長治
- 63 ショート・ミステリー／ボタンの花・芦川澄子
- 66 花時計／神戸の名物料理・青木重雄
- 68 編集後記

■ 表紙／小磯良平・カメラ／米田定蔵・杉尾友士郎・デザイン／橋昭三

確信をもってタジマの目が選んだ世界の宝石の名品！



DIAMOND 5.35cts

写真は原石の40.48倍

宝石輸入商・宝飾店

タジマ

TAJIMA SHOJI CO., LTD  
元町2. TEL (3) 0387-2552

# 神戸を美しい街にするために

白川 中西 勝渥



——この春、4月に神戸の美術家集団で、貝原六一、中西勝、鴨居玲、西村元三朗氏などが中心になり、『美術家まつり』を企画され、須磨の藤田ガーデンで、盛大に行われるそうですが、神戸の文化団体の動きが何となく活潑になってきたようですね——

「先日、淡州堂の主人、藤原有氏と詩人の足立巻一氏との肝煎で、  
ク節分の夜を、盃の名器で酒を汲もう」という集いをやりましてね  
集まつた人たちは、朝倉斯道、藤原徳次郎、竹中郁、岡部伊都子、  
及川英雄、志智嘉九郎、出口草露、小林武雄、亜騎保、仙賀松男、  
宮崎修二朗など多彩なメンバー。

この集いには一つの約束があつて、一人、一人が珍しい肴をもち  
よることなんだ。そこで節分に因んで「奇々怪会」と会名が決定し  
これからも時々集まろうと言うことになつたわけだが、この日もい  
るいろ珍らしい肴が集まりました。私はウラをかけてやろうと、浜  
松の名物「ふる里」(だんご)——盃そう竹の中にはいつた紫蘇の  
葉包みの甘いだんご——にしたが、たちまちきれいに売れましたよ

だんごが酒の肴になつたとは正に // 奇々怪々 // ですね。

ところで、終戦後の荒涼とした町で、互いに友を呼びあって、「阪神ペン・クラブ」という文化団体が自然に出来て、毎月のようになつたものです。また、兵庫県の美術家連中もやはり、団体を作り集まつたので、六甲の松泉閣で合同して一席の歓をつくしたものでした。// 同人雑誌 // という名が物語つてゐるよう、芸術の世界は、結局孤独なんですね。友を呼び、同人を求めなければやりきれない孤りぼっちの世界なんだ。個性的な仕事であればあるだけに。……」

——特に地方在住の文化人の場合はそうでしようね? —

「そうなんだ。日本では文化面でも東京がメツカだ。文化の中央集権的傾向は著しい、だから、地方での文化活動も、お互いの仕事の上で、いま言ったような孤独やコンプレックスをねじ伏せて、活潑な仕事を見せることは、賛成だナ。

幸い神戸は、文化や芸術に理解のある実業家、役人が多い。文化団体の育成には大いに手をかしてもらいたいものだ。ただし、文化人が彼等のタイコモチ的な存在になつてはみつともない。徳川時代の歴史をみても明らかだ。世俗的な権威に接近する場合は、その点をわきまえないとね」

——三ノ宮駅のターミナル、そごう神戸店、国際会館を結ぶ地下街が計画され、実現されるそうですが、——

「私は、地下街が計画されるなれば、いい機会だから、同時に地表をもすっきりしたものにしてもらいたいと思います。

国際都市、神戸の海の玄関の方は、摩耶埠頭もでき、大神戸港の名に恥じない、立派なものなんだが、陸の玄関と見られる、三宮のターミナルは混雑していて、みつともない。地下街をつくるときに地上の業者を優先して地下に移すことにして、三宮駅の現在のゴミゴミした商店街を一掃し、その分だけ緑の広場にするような経緯をほどこしてもらえないものか? 地下街を作ることは、地表にそれだけの空白を作つてこそ意義がある。

——現在の都市にとって、これほど貴重なものはないよ。あの駅



前をいまの三倍ほどもある芝生か公園にして、その中に路線だけを残す。それでこそ、神戸らしいスタイルの陸の玄関が出来上るのじゃないか?」

——いわゆる、町づくりの一つになる訳ですね。最近市民の間に

も町づくりへの関心が深くなつて来たようですが——

「前にも言ったが、スマッグ対策は、新しい町づくりの重要な問題ですね。スマッグと言う近代都市の病的現象に對して、市民は無関心すぎる。その無関心さは、政治に對する無関心と言うことと同様に責められていい。

日本人は「私害」に對しては敏感だが、「公害」に對しては無関心だと言われるが、これは市民意識の低調さを物語るもので、恥かしいことだね。私害だとゴミ箱一つ動かされても文句を言うが、市民全体として蒙る、「公害」に對しては、あなた任せである。われわれの大気を汚している、あの毒蛇のよな亜硫酸ガスに對して、もつと共通の連帶意識を持たなくつちや。……

ベッド・タウンを六甲山麓に計画して、住宅地帯を造成しながらその上で海岸線を埋め立てて工場誘致を計かると、これは実際、矛盾がある。海岸と山が近いと言う地形上からも、阪神間ではむやみに海に工業用地を設けるべきではない。煙はたちまち山麓のベッドタウンの空を冒すだろう。

西宮から神戸にかけて、ダンブ・カーが北から南に走りまわつているのだが、その一石二鳥の狙いは、じつは、こつけいなイタチごっこだ。大気が汚れては、六甲山麓というせつかくのベッド・タウンもぶちこわしだ。その例は東京の田園調布が、京浜間のスマッグのため田園失格したのをみててもわかる。」

——何か防止方法がないもんですかね?

「その為には、煙突に特別な装置がいるんだそうだね。そしてそれが莫大な費用がいるらしい。しかし、工場当局は市民の無関心をよいことに、いつまでも放つては置けまい。近く又市会議員の選挙があるようだが、候補者の政見が、例の如き道路づくり、橋づくりではお粗末すぎる。新しい町づくりのために、地上よりも眼を上空に向けてもらいたい。そんな新鮮な政見をひっさげた候補者を出でもらいたいものだナ。」

神戸とエトランゼ

# 手紙ふるい

王重山氏を訪ねて

陳舜臣  
え・松本  
宏

「私はなにもかも中途半端でして」と王重山さんは謙遜される。学校にしても、華僑の同文学校にも日本の学校にも通ったことがある。横浜の支店に預けられたこともある。上海にもとばされた。第一次世界大戦後、アメリカ留学のため便船を待つたが、一年間船室が予約すみなのであきらめた。妹さんの嫁いでおられるサイゴンにも数年間滞在したことがある。が、いつも神戸へ戻ってきた。王さんにとっては、神戸は母船なのだ。戦雲がたれこめ、世界の観聽をあつめている金門島は、今までこそ有名だが、それ以前はほとんど人に知られぬ土地だった。その金門島から王さんのお祖父さんが長崎に渡ってきたのは、明治も初年である。はつきりした年代はわからない。

「なにか国で商売でもされて、その連絡とか、あるいは支店をつくるという目的でもあつたのでしょうか?」

「いえ、わかりませんね。なにしろ祖父の時代ですから。からだ一つに、風呂敷包みぐらい下げてきたのではないでしょ?」  
と王さんは答えた。

海外に出て成功した人で、よく出身をかくすのがいる。渡来前、小百姓をしていたのはけつして恥ずべきことではない。それなのに——ワシのオヤジは国で手広く商売をやつとつた。で、ワシは日本に支店をつくるためにきたのじやが、そのまま居ついてしまつてね。ワッハハ……

などとお腹を揺すぶる人がいる。

さすがに王さんは、そんなみえを張らない。真正直なお人柄である。

王一家は長崎から大阪、それからさらに神戸と、居を移した。どういうわけか、明治二十年代の末に、大阪から神戸へ、中国人が大量に移住している。

そのころの神戸には、居留地以外に洋館というものがほとんどなかつた。当時の三宮駅(いまの元町駅)から県庁に至る、神戸の表玄関の角に、福建公所(戦災で昔の建物は焼けたが、おなじ場所に戦後再建した)と王さんの自宅がならんでいた。この二軒の赤煉瓦

は四隅を圧していたそうだ。

雑穀貿易で産をなした王家は、海岸通三丁目に店舗をかまえていた。これは四階建の赤煉瓦という豪壮なものである。屋号を「復興号」といって、横浜にも支店があった。

明治末年から大正のはじめにかけてが、在留華僑の黄金時代であつたろう。大陸、南洋貿易の実権が、華僑の掌中にあつた。貿易方式がD／P、D／Aの時代であるから、海外顧客と血のつながりでもない限り、危くて商売ができない。だから日本商人は手を出しかねて、サプライヤーの立場を守つた。それに、財閥がまだそれほど強力でなかつたこともある。

弁髪中国服のダンナ衆が、夕方ともなれば人力車をつらねて、取引客を招待するため、花隈の坂をのぼつたものだ。近世日本の大変革期といえば明治維新であろう。チヨンマゲを切り、刀を差すことをやめた。日本の明治維新に相当するのが、中国辛亥革命である。それによつて弁髪を切ることになった。革命が成り、清朝がつぶれ、民国元年となつたのが、ちょうど日本の大正でも元年にあたる。その前後が、中国の画期的な時代だったわけだ。

明治三十五年生まれの王重山さんは、中国革命をこどものころに経験した。といって、王さんは神戸生まれである。しかし、革命の鼓動はひしひと海外にも伝わっていたのだ。

「神戸小学校時代、きんつばの高砂屋のご主人が同級だったのをおぼえております」

と王さんは語つた。

往時は茫々である。

こどものころ、王さんの家にはいろんな来客があつた。松方さん、滝川さん、小寺さん、岡崎さん……そのなかでも、いつも馬車に乗つて訪ねてきた松方さんが印象に残つてゐる。こんな人たちは、王さんの父親王敬祥氏が実業家としてつき合つたのである。が、まったく別種の人たちも出入りした。國へ帰れば反逆者として死刑が待つてゐる革命家たちである。彼らは王さんの家の庭で、胡弓をかなで、はるか祖国をしのび、騒ぐ血をおさえたであろう。

孫文は山本通りや北野町のあたりを散歩するのが好きだったらしい坂のうえから神戸港を見下ろして、いまに共和革命が成功すれば上海は……青島は……と、胸に夢をえがいたにちがいない。

当時の華僑は花隈通いばかりをしていたのではない。懸命にはたらいていた。また、中国と日本を往来する革命家たちをも送迎した神戸は日本の出入口だったのだから。

孫文と神戸については、県立女学校における「大アジア主義」の講演と、舞子の移情閣（俗に六角堂と呼ばれているが、実際は八角になっている）が名高い。移情閣は、鐘紡の重役にもなった華商吳錦堂の別荘で、孫文が立ち寄った所として有名である。戦後、石碑もたつて、遺跡めいた扱いをうけている。むろん、孫文は吳氏とも親交はあった。しかし、神戸滞在中、孫文の書信連絡などは、ほとんど王さんの父親王敬祥氏気付でなされた。それだけ信頼されていたのである。

「父にあてた孫文の手紙もたくさんあったのですが、革命史資料として、台湾の国民政府の方が、もって行かれました」と王さんはおっしゃった。

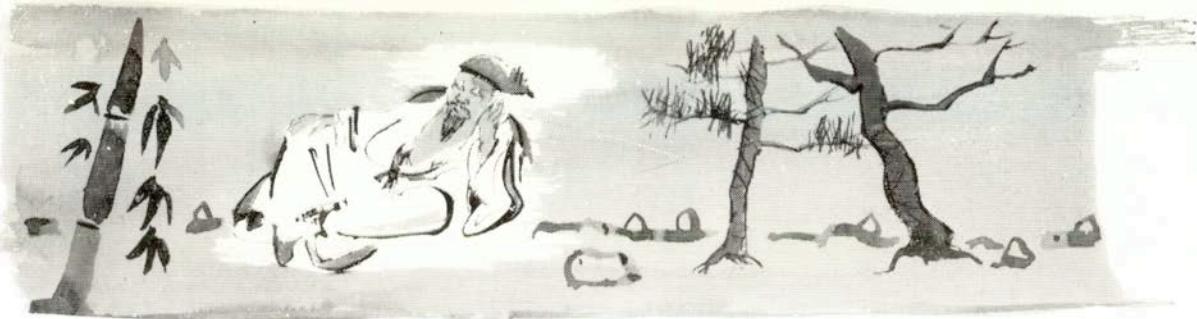
ただ孫文肉筆署名の文書を二通だけ、王さんは記念として手もとに残した。手紙ではなく、約束手形である。一通の金額が金四千円也。この金がどうなったか、王さんは知らない。手形が残っているのだから、返済されていないのではあるまいか。一通四千円、計八千円といえば、当時では大金である。家が何軒も建つ金額なのだ。今は亡き王敬祥氏にしても、返してもらうつもりはまったくなかつたのだろう。おそらく孫文がむりやり手形を書いて署名したものと思われる。

ある日、王さんがテレビを見ていると、宮崎滔天というのが出てきた。

——宮崎さんはそんなに有名なのかな?

と王さんは思った。宮崎滔天の署名のある手紙が家にたくさんあった。……宮崎滔天は孫文に協力した日本側の志士である。

そんな人たちが王さんの家に出入りしたが、こどものころだから



王さんにはどんな関係なのか、わからなかつた。

「ふるい文書は、引っ越しのたびに散逸しまして……」

とおっしゃる王さんにお願いして、ふるい手紙を見せていただく

が、おもしろいのも残つてゐる。

じつに達筆な手紙がある。みると安福派の巨頭王揖唐の署名があつた。

それに劣らぬみごとな筆蹟、しかも円満清楚の字体がある。梅蘭芳の手紙だつた。第一回来日のさい、王家に立ち寄つたのだ。

——先日は、途中で電話があつたため、ゆっくり歓談できず残念でした。

という文面だつた。そういうとき、梅蘭芳は神戸の聚楽館の舞台に出たのである。

陳英士が東京から神戸の王敬祥あてに出した手紙もあつた。陳英士とは、国民政府の大立物、陳立夫、果夫兄弟の父親なのだ。孔宋蔣陳と併称されるほど、陳家は中国でも有数の資産家として知られている。

その手紙の内容は「借用証の期限がきたが、もうすこしのばしてくれ」というのであつた。

星霜は移つた。王家の手紙もあるびて來た。若き日の梅蘭芳の手紙なども、すこし虫のくつたあとがある。

その手紙のなかに、歴史の断層がのぞいてゐる。

貿易会社社長の王重山さんは、祖父の代からかぞえて日本での三代目。いま、四代目の息子さんたちが活躍しておられる。

王さんの母堂、王敬祥夫人はことし八十九才。お元気である。革命家の出入りしたころの王家のホステスであつたが、彼らにそそいだあたたかい目ざしを、いまも来客にむけられる。

(作家)

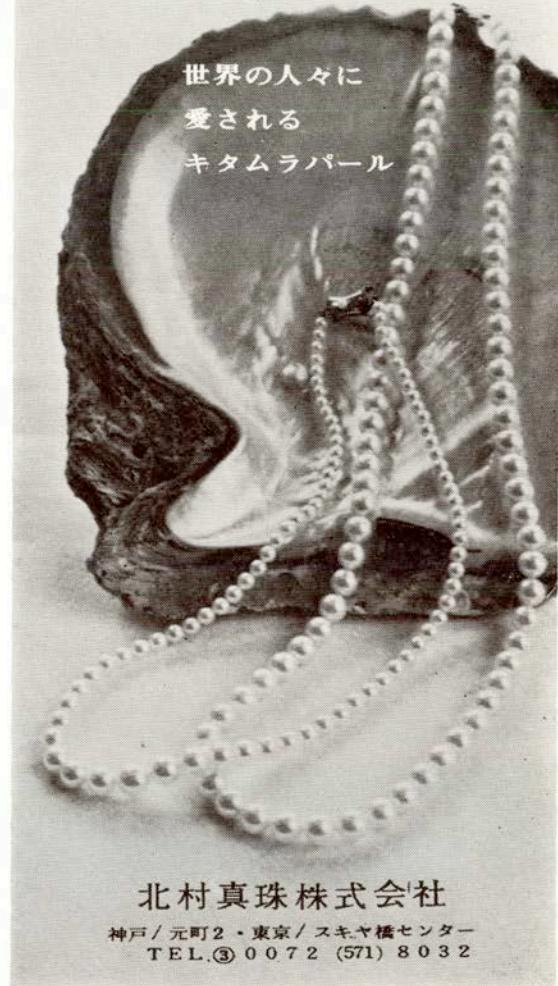
# マロングラッセは ヒロタの銘菓

元町通三丁目 TEL ③二三四〇番

世界中のからほめられた  
日本の誇り 神戸のほまれ

## 北村パール

世界の人々に  
愛される  
キタムラパール



北村真珠株式会社

神戸/元町2・東京/スキヤ橋センター  
TEL. ③0072 (571) 8032